

雑草を抑えて収量も安定 秋まき小麦有機栽培のコツ

概要 Abstract

パン用途が多い有機栽培小麦は生産拡大が期待されています。そこで、秋まき小麦の安定生産（越冬性向上、収量増加、雑草抑制）技術を開発しました。

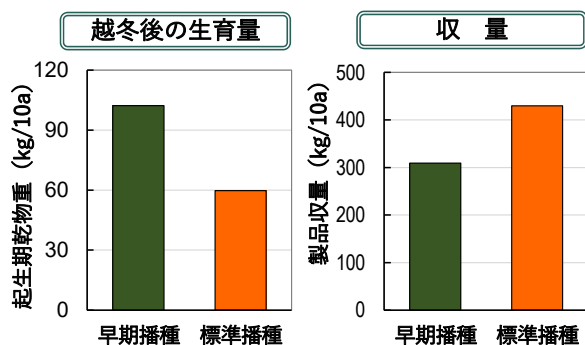


収穫期の小麦とシロクローバ

成果 Results

播種時期と越冬性・収量

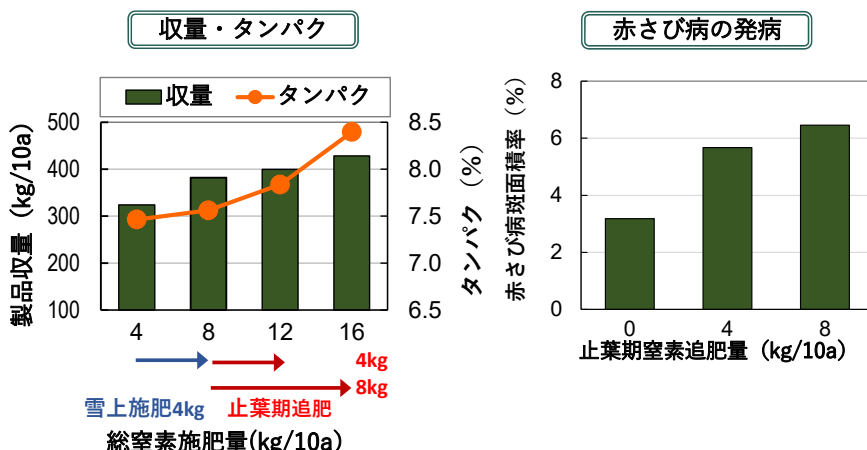
「きたほなみ」の早期播種は越冬性に優れますが、標準播種の方が収量は多くなります。



早期播種: 8月下旬～9月上旬
標準播種: 9月中旬

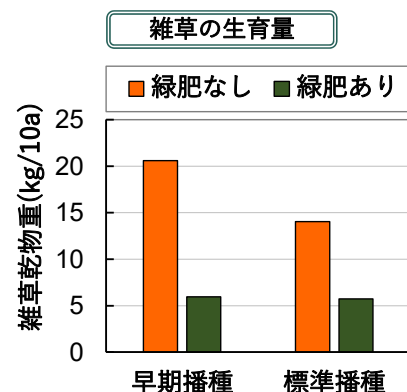
施肥量と収量・タンパク・病害

3月中旬の雪上施肥や止葉期の追肥により、収量やタンパクを改善できます。ただし、窒素追肥量が多くなると赤さび病は増加します。



間作緑肥の効果

間作緑肥のシロクローバは、雑草を大幅に抑制できます。



成果のまとめ

以下の技術を有機栽培秋まき小麦の安定生産に活用してください。

項目	推奨する技術	備考
品種	きたほなみ ゆめちから	・「きたほなみ」の方が安定多収 ・「ゆめちから」の方が高タンパク
播種時期	8月下旬～9月中旬	・収量性優先: 標準播種(9月中旬) ・越冬性優先: 早期播種(8月下～9月上旬)
播種量	標準播種: 255粒/m ² 早期播種: 340粒/m ²	・255粒/m ² =約10kg/10a ・340粒/m ² =約13kg/10a ※1000粒重が38gの場合
窒素施肥	基肥 4 雪上 (3月中旬) 4 止葉期(5月下旬)4～8 合計 12～16 kg/10a	・次の場合は総窒素施肥量16kg/10aを推奨 ①地力が低い圃場(熱抽窒素0～3mg/100g) ②「ゆめちから」を栽培 ③タンパク向上を目指す場合 ・過剰な追肥は赤さび病発病を助長
間作緑肥	シロクローバ0.3kg/10a 小麦と同時に播種	・雑草抑制に効果的 ・ただし、増収効果がない場合もある

普及 Dissemination

- 本試験は雪腐大粒菌核病の発病がない圃場で行われました。
- 早期播種はコムギ萎縮病の発病を助長する恐れがあるので、発生地域では品種に留意してください。

連絡先 Contact

中央農業試験場
農業環境部 生産技術グループ
0123-89-2001
central-agri@hro.or.jp